「ひらの青春生活応援事業」に 関するいくつかの プロローグ　1

No. 1　きっかけ　‥‥‥　職員の体感

中学校を卒業し、高校へ進学するが、卒業にいたらないケースがある。
平野区内には、大阪府立の高校が、4校設置されている。
隣接する区の高校含めて、平野区内の中学校から進学している生徒がとても多い。
当時から、保健福祉センターでかかわるこどもに、厳しい環境にあるケースが少なくないのではないかという職員の感触。
当時の平野区の施策で、高校生年代に対する支援施策が、エアポケット。

No. 2　当時のようす　‥‥‥　現場が大切（現場でないと感じないこともある）

平野区内の府立高校へ出向き先生方にお話を伺うと‥‥‥
不登校や中途退学になる生徒、遅刻が常態化している生徒、日々の対応にかかる先生方のご苦労のたいへんさ
中退した後の進路は、さまざまあるが、生活そのものも安定していない場合が多いと考えられる。　など
意外と自治体（市町村）の福祉サービスにかかる情報が行き届いていない。（生活保護の収入認定など）
当時の高校の先生方（現在もそうです）が、平野区役所職員へとてもとても、ご協力いただいた（ている）。

No. 3　生徒ひとりひとり、事情は、さまざま　‥‥‥　想像を超える実態

生徒自身の問題だけでなく、家庭の問題や社会の問題など、ひとりひとり異なる事情があること。
具体的には‥‥
勉強する習慣がない、人間関係がうまくいかない、学校に居場所がない、社会と接する機会が少ない、長休明けに不登校になりがち、
保護者の無関心、保護者が中退を安易に容認してしまう、アルバイトで生計をささえている、生活サイクルが不安定、
コミュニケーションが不得意、学校のサポートの限界、制度の利用が不十分　　などなど　　（ 関連 ＝ 青春ガイドブック ： P6 ）